

第1回 (2019年8月8日@桃原公民館)

「ウチナンチュは何を食べてきたか」宮城都志子
(料理教室主催・管理栄養士)

大交易時代が今の昆布文化をつくりました。今でも北海道の棹前昆布の95%が沖縄に来ていて、行事には欠かせません。蔡温はたぶん庶民に栄養と休養を与えるために、いろんな行事を入れたんだと思います。本土復帰後には、そば粉を含まない「沖縄そば」、常温保存が認められた「沖縄豆腐」、焼酎の例外表示として「泡盛」が、沖縄の食文化として認められました。



今も定着している島野菜は私たちの命を育んでくれましたが、忘れてたり消えたりしています。やんばるにはそれを守り、再現するエネルギーが十分あります。これからたくさんの観光客が押しかけてくるでしょうが、特別なことはしなくてもいい。地元で持っているエネルギーをうんと活用していけばいいと思います。

「ファーカングの旅を続けて」多田千尋
(東京おもちゃ美術館館長)

こんなに木目の美しい積木を見たことがありません。国頭村のリュウキュウマツの積木を「世界一木目が美しい積木」として世界を目指してはどうでしょうか。「ファー」は葉っぱ、「カング」は蔦。祖父母と孫の結びつきを語っています。



「魚とは、なにか? -ことばから考える自然と人間のかかわり」
高橋そよ (琉球大学人文社会学部准教授)



自然とどう向き合うかが言葉からわかる。魚の名付け方をみることで、魚をどのように認識、理解、捉えているのかが見える。漁師は「身体」を使って世界を豊かにとらえている。こういった豊かさがやんばるにもある。

第2回 (2019年10月10日@辺戸公民館)

「誇らしやや国頭~王国の繁栄とヤンバル」賀数仁然
(沖縄歴史文化エンターテイナー)

統一国家琉球王国、平和になってから首里城の城壁が二重になったのはなぜ?

海から来たもの



16世紀に始めた国家プロジェクト。それまでお客様はウェルカムな城だった。外交の国だから。悪い奴が来るというので、もう一巻きした。中国、朝鮮王朝、日本、東南アジアの国々と交易し、儲かってしよがなかつた時代。



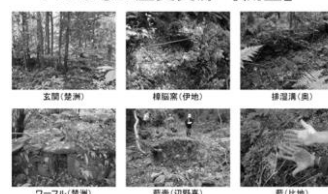
国上の深山にアヲリというものが現れる山をアヲリ岳と云う。
五色鮮染で種々荘厳なり。三つの岳に三山おおいりつくす。
(琉球神道文) 森中人

最古の琉球国図には首里城の次に大きく「国頭城」とある。グスクは祈る場所。琉球の王は即位すると神様から神号をもらう。神様が出てくるサインは辺戸の安須森に1度だけ出る。安須森は神様が降りる場所、神様が最初に作った場所、そこから染み出てくる水だから正月に国王はほしい、神の水。

「国頭村の古道と開墾」齋藤和彦
(森林総合研究所森林管理資源研究グループ長)

森に入ると、数多くの歴史的な遺産が眠っている。本当は自然遺産ではなく、自然プラス文化の複合遺産、あるいは文化遺産と言っていい森ではないか。昔道、開墾跡、藍壺猪垣、炭窯等の歴史的な山の遺構を、村の身の丈に合った地域振興に使えないか。

やんばるの歴史資源『開墾』



「山原北部の芸能」小林幸男
(県立芸大付属研究所共同研究員)

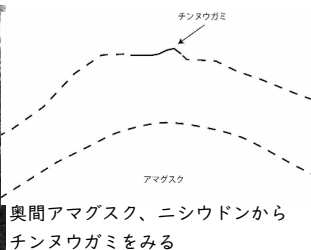


国頭村ではまだ覚えている人たちがいて、ウシデークの中心地です。山原北部には、昔からの芸能、神歌が伝わっている。女のエイサーを独自に作り、ウシデークでは様々な工夫をすることで、残ってきた。

第3回 (2019年11月22日@辺野喜公民館)

「やんばるの古代神と自然と人と」当山昌直
(南島文化研究所特別研究員)

民間神話の「アーマンチュ」はヒトの祖先とされるオカヤドカリを意味し、「アマングスク」に類する地名が沖縄・奄美にたくさんある。「アマングスク」は人間が拝む、遙拝する場所で、神様が降りる所は別にあり、対になっていることがわかった。奥間はチヌウガミ、辺戸はイヘヤ(安須森の尖った所)、奥は立神を、アマングスクから拝んでいる。沖縄にはまだまだ民間の神様が残っている。



住んでる人たちにとって生物多様性とかは難しい、わかりやすいのは風水ではないか。自然と人をつなぐものは何か。賢い利用の仕方が今後の課題になる。お年寄りにはすごい知識を持っている。私は先人たちがうまく自然を利用してきた知識を記録していく。これを生物文化と呼ぼうと提案しています。

「琉球諸島のおもしろさ:島を渡った動物、島に残った動物」
伊澤雅子 (琉球大学理学部長(教授))

琉球列島は「動物と島の持っている歴史が世界のどこにもないくらい複雑で珍しい」というのがこの価値です。

リュウキュウヤマガメとヤヤマセマルハコガメは、ずいぶん中国に持ち出されています。自分たちの自然が盗まれないように、「目」になっていただきたい。



桑子敏雄 (一社) コンセンサス・コーディネーターズ代表)



世界遺産になれば、たくさんの方が来る。開発圧力も強まる。国頭村のこれから、特に観光の方向を考える計画と、無秩序な開発をコントロールする計画両方が必要と提案し、観光振興基本計画と景観計画策定の委員長をしました。それがそろったのが現在の状態です。

❖これまでのシンポジウム(3回)の紹介です。❖